忠

巻の三

三國志

三の巻

吉川英治著

講談社版

三國志卷の三

不許複製

昭和十五年七月二十三日　初版印刷
昭和十五年七月二十八日　初版發行
昭和二十二年八月十日　再版印刷
昭和二十二年八月二十日　再版發行
定價六十圓

著者　吉川英治
東京都文京區音羽町三丁目十九番地
發行者　尾張眞之介
東京都文京區久堅町百八番地
印刷者　大橋芳雄
東京都文京區久堅町百八番地
印刷所　共同印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町三丁目十九番地
株式會社　大日本雄辯會講談社
振替口座　東京三九三〇
電話　九段(33)代表　一三一番　一八六番

配給元　日本出版配給株式會社(東京都千代田區神田淡路町二ノ九)

目次

草莽の巻

絶滅の會……二
天賜……三
人間燈……四

大權轉々……三六
秋雨の頃……三三
死活往來……三〇
牛と『いなご』……二三
愚兄と賢弟……二四
毒と毒……二六
壓女……二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

綠林の宮……一九
改元……二二
火星と金星……二三
兩虎競食の計……二五
禁酒碎杯の約……二六
母と妻と友……二八
大江の魚……三〇

神亭廟……三六
好敵手……三七

挿畫　恩地孝四郎
　　矢野知道人

草莽の卷

絶纓の會

一

その後、日を經て、董卓の病もすつかり快くなつた。

彼は又、その肥大强健な體に驕るかのやうに、日夜貂蟬と遊樂して、帳裡の痴夢に酔く事を知らなかつた。

呂布も、その後は、以前よりはやゝ無口にはなつたが、日々精勤して、相府の用仕は缺かさなかつた。

董卓が朝廷へ上る時は、呂布が赤兎馬に跨がつて、必ずその衞軍の先頭に立ち、董卓が殿上に、ある時は、又必ず呂布が戟を持つて、その階下に立つてゐた。

或る折。

天子に政事を奏する爲、董卓が昇殿したので、呂布はいつものやうに戟を執つて、內門に立つてゐた。

出番の暇な血ほど、氣懶い睡氣を覺えるやうな日である。呂布は、そここゝを飛び交ふ蝶には、睡魔に襲はれ、眼をあげて、夏近い太陽に耀く木々の新緑や眞紅の花を見ては、

『――貂蟬は何をしてゐるか』

と、煩悶に囚はれてゐた。

ふと、彼は、

『けふは必ず董卓の退出は遲くならう。……さうだ、この間に』

と、考へた。

むら〳〵と、思慕の炎に驅られ出すと、彼は矢も楯もなかつた。

遽に、何處かへ、驅け出して行つたのである。

董卓の留守の間に――と、呂布はひとり相府へ戻つて來たのだつた。そして勝手を知つた後宮へ忍んで行つたと思ふと、戟を片手に、

『貂蟬。――貂蟬』

と、聲を密めながら、貂姫の室へ入つて、幔をのぞいた。

『誰？』

貂蟬は、窓に倚つて、獨り後園の畫を見入つてゐたが、振向いて、呂布のすがたを見ると、

『オ、』

と、馳け寄つて、彼の胸にすがりついた。

『まだ太師も朝廷からお退がりにならないのに、どうして貴郎だけ歸つて來たのですか』

『貂蟬。わしは苦しい』

呂布は、呻くやうに云つた。

『この苦しい氣もちが、其女には分らないのだらうか。實は、けふこそ太師の退出が遲いらしいので、せめて束の間でも、わし一人そつとこゝへ走り戻つて來たのだ』

『では……そんなに迄、この貂蟬を想つてゐて下さいましたか。……欣しい』

貂蟬は、彼の火のやうな眸を見て、はつと、脅えたやうに、

『こゝでは、人目にかゝつていけません。後から直ぐに參りますから、園のずつと奥の鳳儀亭で待つてゐてください』

『きつと來るだらうな』

『何で嘘をいひませう』

『よし、では鳳儀亭に行つて、待つてゐるぞ』

呂布はひらりと廊へ身を移してゐた。そして、木の間を走るかと思ふと、後園の奥まつた所に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ある一閣へ來て、貂蟬を待つてゐた。

貂蟬は彼が去ると、いそ〳〵と化粧を凝し、たゞ一人で忍びやかに、鳳儀亭の方へ忍んで行つた。

柳は綠に、花は紅に、人無き祕園は、熟れた春の香ひに蒸れてゐた。

貂蟬は、柳の糸のあひだから、そつと鳳儀亭のあたりを見まはした。

呂布は、戟を立てて、そこの曲欄に佇んでゐた。

二

曲欄の下は、蓮池だつた。

鳳儀亭へ渡る朱の橋に、貂蟬の姿が近づいて來た。花を分け柳を拂つて現れた月宮の仙女かと怪しまれるほど、その粧ひは麗はしかつた。

「呂布さま」

「おう……」

ふたりは亭の壁の陰へ倚つた。そして長いあひだ無言の儘でゐた。呂布は、體ぢゆうの血が燃えるかと思つた。うつゝの身か、夢の身かを疑つてゐた。

『……おや、貂蟬、どうしたのだね』

『……』

『ええ、貂蟬』

呂布は、彼女の肩をゆすぶった。——彼の胸に顔を當ててゐた貂蟬が、そのうちにさめ〳〵と泣き出したからであつた。

『わしとかうして會つたのを、其女は欣しいと思はないのか。いつたい、何をそんなに泣くのか』

『いゝえ、貂蟬は、欣しさの餘り、胸がこみあげてしまつたのです。——お聞きください、呂布さま。わたくしは玉允樣の眞の子ではありません。さびしい孤兒でした。けれど、わたしを眞の子のやうに可愛がつて下された玉允樣は、行末は必ず、凛々しい英傑の士を選んで嫁がせてやるぞ——といつも仰つしやつて下さいました。それかあらぬか、將軍をお招きした夜、それとなく私と貴郎とを會はせて賜はりましたから、私は、ひと度、貴郎にお目にかゝると、これで平生の願ひもかなふかと、その夜から、夢にも見るほど、樂しんでをりました』

『ウむ。……ム、』

『ところが、その後、董太師のために、心に秘めてゐた想ひの花は、蹂みにじられてしまひました。太師の權力に、泣く〳〵も心にそまぬ夜々を明かしました。もうこの身は、以前のきれいな

身ではありません。……いかに心は前と變らず持つてゐても、汚された身を以て、將軍の妻室に侍くことはできませんから、それを思ふと、恐ろしくて、口惜しくて……』

貂蟬は、四邊へ聞えるばかり嗚咽して、彼の胸に、止め途なく縋え泣いてゐたが、突然、

『呂布さま。どうか貂蟬の心根だけは、不憫なものと、忘れないでゐてください』

と、叫びざま、曲欄へ走り寄つて、蓮の池へ身を投げようとした。

呂布は、びつくりして、

『何をする』

と、抱き止めた。

その手を、怖しい力で、貂蟬は振りのけようと爭ひながら、

『いえ、いえ、死なせて下さい。生きてゐても、貴郎と此世の御緣はないし、たゞ心は日毎苦しみ、身は不仁な太師の贄になつて、夜々、虐まれるばかりです。せめて、後世の契を樂しみに、冥府へ行つて待つてをります』

『愚なことを。來世を願ふよりも今生に樂しまう。貂蟬、今にきつと、其女の心に添ふやうにするから、死ぬなどと、短氣なことは考へぬがいゝ』

『えつ……ほんとですか。今のおことばは、將軍の眞實ですか』

『想ふ女を、今生に於て、妻ともなし得ないで、豈、世の英雄と呼ばれる資格があらうか』

『もし、呂布さま。それがほんとなら、どうか紹蟬の今の身を救うて下さいませ。一日も一年ほど長い氣がいたします』

『時節を待て。それも長い事とはいはぬ。――又、今日は老賊に從づて、參殿の供につき、わづかな隙を窺づてこゝへ來たのだから、もし老賊が退出して來ると忽ち露顯してしまふ。そのうちに、又よい首尾をして會はう』

『もう、お歸りですか』

紹蟬は、彼の袖をとらへて、離さなかつた。

『將軍は、世に竝ぶ者なき英雄と聞いてゐましたのに、どうしてあんな老人をそんなに、怖れて、董卓の下風に從いてゐるのですか』

『さういふわけではないが』

『私は、太師の聲音を聞いても、ぞつと身が顫へて來ます。……噫いつ迄も、かうしてゐたい』

猶、寄り縋つて、紅淚雨の如き姿態であつた。――ところへ、董卓は朝から歸つて來るなり、凡なるぬ血相を湛へて彼方から歩いて來た。

古道人画

三

『はて。貂蟬も見えないし、呂布もどこへ行き居つたか？』

董卓の陣は、猛燄に燃えてゐた。

今し方、彼は朝廷から退出した。呂布の赤兎馬は、いつもの所に繋いであるのに、呂布のすがたは見えなかつた。怪しみながら、車に乘つて相府へ歸つてみると、貂蟬の衣は、衣桁に懸つてゐるが、貂蟬のすがたは見當らないのである。

『さては』

と、彼は、侍女を糺して、男女の素を見つけに、自身、後園の奥へ探しに來たのであつた。

二人は鳳儀亭の曲欄に屈みこんで、泣きぬれてゐた。貂蟬は、ふと、董卓の姿が彼方に見えたので、

『あつ……來ました』

と、あわてて呂布の胸から飛び離れた。

呂布も、驚いて、

『しまつた。……どうしよう』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo